

都市経営研究科 都市政策・地域経済コース ワークショップ 要約

テーマ『あいちトリエンナーレ2019から2022へバトンをつなぐ』

講師 津田 大介様

場所:ライブ配信による講演会と意見交換&ディスカッション

日時:2020年6月19日(金)18:30-21:30

参加者数:約300名(協力 ヒューマンライツ・ナウ関西グループ)

○「あいちトリエンナーレ2019」の概要

1 「あいちトリエンナーレ」とは

2010年から愛知県が都市型の国際芸術祭として、4年に1度の周期で美術館や文化施設などの地域資源を活用して、2019年8月1日～10月14日まで開催。

現代アートに特化し、現場に基づいたアート展示が特徴。

2 開催の目的

アートを通じた地域資源の開発、振興、観光客誘致と、交流人口、定住人口の増加

地元民もボランティアとして参加し、まちづくりに関わった。

外部からディレクターを招聘したうえでコンセプト決定し、行政が実施。

3 国内の状況

ここ20年ほど大地の芸術祭、瀬戸内国際芸術祭などが成功し、まちおこしを狙う地方都市が増え、全国に誘致希望が広がり、乱立状態となっている。

4 会場

愛知県内の4か所(愛知芸術文化センター・名古屋市美術館・四間道及び円頓寺界限・豊田市美術館)で開催。

美術館+まちなかの複合拠点を使い、12億円という大規模開催。

5 コンテンツ

現代アートに加え、映像プログラム、ダンス、演劇、ポピュラー音楽、教育プログラムなども展開。

6 コンセプト

「情の時代」がテーマ。世界中で感情が支配する時代になっていることにヒントを得た。

「情」の字に含まれる、多義性(①感覚による心の動き=感情、情動②本当のこと。本当の姿=実情、情報、情景③人情・思いやり=情け)に注目。漢字圏以外のアーティストには同じ意味を持たせる英単語として「passion」とした。「受難」(passive=受動)から「心が変わる=情熱」の意に変わった単語でもある。

多義性のあるテーマは、アーティストにとっても取り組みやすい。

サブテーマは作らず、社会的、政治的テーマを扱う都市型国際芸術祭(ドクメンタ)などを参照し、日本型ドクメンタのモデルを示すことを目標とした。

7 基本コンセプト

先端性・祝祭性・複合性

8 その他拘ったポイント

ジャーナリストとしての見解、問題提起という観点から「分断、差別、ジェンダー」に着目。

世界 149 か国中、女性の平等性が 110 位で留まっていることから、本芸術祭で問題提起。

メキシコ的女性作家によるフェミニズムアートの展示に加え、参加アーティストの割合もほぼ半々を実現し、新聞などのメディアでも採り上げられた。

○「あいちトリエンナーレ 2019」の効果

1 売上・来場者数

前売り数は前回の 2 倍、来場者数(670,546 人)、総チケット売上は前回比 1.5 倍、7,000 万円黒字を出し、全ての分野でジェンダー平等を達成。

2 地方創生効果

交流、定住、経済効果が得られた。また、円頓寺商店街は売上が 2, 3 割増加(次回も開催希望)

3 愛知県の現代美術支援継続

大村知事が、愛知県で現代美術の支援継続について、海外のように日本でもアートを手厚く支援し、美術購入予算の倍増、日本在住若手作家の現代アートを積極的に購入すると表明。

全国の文化芸術の若手支援になり、作品の購入は県民の資産にもなる。

4 美術賞の受賞ラッシュ

小泉明朗、藤井光、市原佐都子、高山明、永田康裕の各氏とサカナクションが各種受賞
専門家からも高評価を得た(五十嵐太郎、藤田直哉、永田晶子、窪田直子の各氏)

○表現の不自由展について

1 開催から中止、再開まで

もともとは、公立美術館で不許可になった作品群を理由とともに、東京で企画展示していたものを、

改めて公立美術館での展示を目指し、厳しい調整作業を乗り越えて実現したが、開催前日に新聞 2 紙で告知後に、クレーム、脅迫電話を受け、開催翌日の 8 月 2 日には河村市長が中止を訴え、大村知事が抗議。その後も電凸脅迫が相次ぎ、検討の結果 3 日に中止を決断。

その後、海外作家を中心にボイコットが起こり、日本作家も続く状況になった。

水面下で再開を目指すも内定していた補助金の交付金が、手続き不備を理由に中止。

文化庁の決定が関係者間の妥協を進め、ようやく再開合意に漕ぎつけた。

2 2020 年度予算について

減額で交付決定。名古屋市は払わないと言っており、知事から市長へのリコール問題になっている。加えて、「あいちトリエンナーレ」の名称変更も、検討課題となっている。

3 検証委の中間最終報告概要

掲示内容は違法性も問題もないが技術専門家の関与がなく、キュレーションに問題あり、しかし、中止のままでは愛知県や美術館にダメージがあるので再開すべきという報告内容。

中止の判断は、職員の疲弊、組織機能の一時停止や円滑・安全な運営の担保ができないことから当時はやむを得ず決断。

4 警備体制

安全担保に関しては、ガソリンテロ予告や数千の脅迫メールに対して警察対応なし。

会場の広さは主催者側ではカバーしきれるものではなく、課題は残る。

5 展示中止は「検閲」に当たるか

憲法学者の見解では、安全上の理由から中止は、検閲とはいえない。

6 現代美術と SNS

スマホ所有者、ツイッター利用者ともに激増しているが、SNS で表面化する部分は氷山の一角であることへの認識が必要。ネット上で感情を扇動する、「義憤に燃えた人・確信犯」「世論工作を請け負った業者」「ビジネスとして煽るメディア(広告収入が入るため)＝悪意・金儲けの人」「中間層(善意の拡散者・上記を信じてしまう人)」には、「マジョリティ」として満たされていないと感じている人々「非マイノリティ」が多い。

具体的な対策として、技術、経済制裁、情報開示請求の改善が求められる。

7 社会の変化

友枝敏雄氏の「リスク社会を生きる若者たち」高校生対象の定点調査で、「校則を守ることは当然か？」の質問に対し、2013 年度では 90% 近くが「当然」との回答結果。クリティカルシンキングの欠如が進んでいるが、現代美術作家になるのは残る 10% の若者のような人々ではないか。

8 結論

『あいちトリエンナーレ』では、芸術と政治の領域が重なる部分から「創発」や「公共」が立ち上がることが証明できたので、2022 年度もそうあってくれればと願っている。

○講演後の質疑

Q. 「平和の少女像」のような政治性の高い作品の展示は税金を使って認められるのか？

A. ゾーニングの問題であり、「不快な表現に税金を使う」ことが問題なのではない。

公共性が強いイベントだったのは事実なので、いろいろな方の論理は聞いたが、納税者の嗜好の多様性を鑑みると、一方的な判断はすべきではないという見解だ。一方、行政の立場では数%のクレームでも中止に追

い込まれる時代ではあるので、時間をかけてタウンミーティングを行うなどは必要だと思う。

Q. 展示中止は防げなかったのか？電凸を予見できなかったか？

A. 予見はしていたし対応策もしていたが予想外の事態が重なったことが大きい。

一つは戦後最悪の日韓関係の悪化が起こったことに加え、京アニ事件が2週間前に起こったことで職員のダメージが大きく、予見しようがない不運が重なった。また、受付の電話回線を増やしたことや、警察とも綿密に連絡した結果、事前発表も説明も控えることになり、事前対策をし過ぎたことが裏目に出た。

Q. 展示再開時の電凸対応策は、成功モデルといえるのか。関係者間の情報共有を、今後どうしていくのか。

A. まずは電凸内容を整理する必要がある。緊急解決を要しない内容であればメールやフォーム対応中心に切り替えられる。また行政では、名を名乗り、先に切らない、という運用が多い。法があるわけではないので、対応時間を決めたくて先に切るのも問題なし、というデフォルト対応にしても良いと思う。

マニュアルは作り過ぎると攻撃する人もまた穴をついてくるので、まずは関係者間で共有しノウハウ化する心構えが重要だ。

Q. 検証委員会の最終報告書は、芸術監督の責任論に終始する。知事は、共犯者としての側面があるのでは？

A. 複雑だが感謝の思いはある。保守政治家としてぶれずに、県民にも自身にもメリットがあることは取り入れる。検証委員会があったから再開もできた。(委員会が)終わった時、委員が一言ずつ述べた内容は非常に良かった。

Q. アドバイザー会議について、どう思うか。

A. 建昌氏が入ったのはよかったと思う。他分野から、理解のある法律家や文化政策に詳しい人が入るのは良いことだが、芸術祭の名前を変えるのは、認知度や海外広報の課題から反対だ。

英語タイトルだけでも残してもらえれば。

Q. 今後の芸術祭の在り方は？

A. 厳しい向かい風の時代になると思う。好きな人だけが楽しむ時代ではなくなった。北川フラム氏のように外部ディレクターと行政に信頼関係があれば問題ないが、芸術に対して行政がセンシティブになり過ぎると芸術家は離れていく。乱立は悪いことではないが、それなりの覚悟を以って文化芸術の必要性を知るべきだ。

Q. ボランティアについてはどうか？

A. ボランティアと観客には感謝してもきれない。都市型ならではのコミュニティの強さは格別だと思う。

シチズンシップを育む有数の事例が生まれた部分は大事に育て、他の都市文化政策への事例にしたい。

〇チャットコメントと回答

コメントに対しての主な回答は次の通り。

「あいちトリエンナーレは、ジェンダー問題ではなく「情の時代」が主軸。結果として美術業界にボールを投げたので達成したと思っている」。「名称変更は、世論次第で残る可能性もある」。「コロナ禍後、一緒に仕事をしたい作家は大勢いる」。「2013 は、政治的作品が受け入れられた。知事は、金は出すが口は出さないを貫いた。立派だ。それを受け入れる土壌や職員のプロ意識があいトリの特徴」。

そのほか、政治性の高い作品の展示の可否、不自由展実行委員会との話し合い、ラーニングエディケーションプログラムへの評価、SNS の在り方、クレーム対策、若者の意識についての意見など、非常に多くの積極的なコメントがあった。